

42 初期の皮膚科学における東大と

京大

長門谷 洋 治

京都大学医学部の皮膚病学徴毒学講座の初代教授松浦有志太郎(1865~1937)が命名した疾患に「正円形枇糠疹 Pityriasis rotunda」がある。たまたまこれと同じ疾患を東京大学の土肥慶蔵(1866~1932)の門下 遠山郁三も記載したがその命名は「連圈状枇糠疹 Pityriasis circinata」とされた。この二種の病名は統一されず、両者併記される形をとった。

松浦は米糠タール剤「ピチロール」を創生したが、タール剤についてはかねて土肥が「土肥方爹硫膏(テールパスタ)」を臨床応用していた。

現在の日本皮膚科学会の機関誌『日本皮膚科学会雑誌』の創刊は、明治三四(一九〇二)年、土肥による(当初は『皮膚科及泌尿器科雑誌』)。他方、松浦の後任の松本信一

は大正一二(一九二二)年、京大皮膚科より『皮膚科紀要』を発刊し今日におよぶ。また当時、梅毒を中心とする性病は大きな問題であったが、土肥は日本性病予防協会の機関誌として『體性』を大正一〇(一九二一)年創刊。松本は日本徴毒学会を創り、その機関誌『ルエス』を昭和二(一九二七)年に創刊。

俗に東大対京大という対比ないし対立が云々される。それが学問上の競争を意味するのであれば、一概に非難すべきものでもないともいえる。上記した二・三の点は初期の皮膚科のみについてみた東大と京大の対比であり、各々の発生はそれなりの背景があつて、いずれも相手を意識して無理をしたというものではない。しかし第三者にはこれがあたかも東大対京大の対立というようにみえるのであろう。

京大は周知のように東大に次ぐ帝国大学として創立されたもので、当然東大に比肩すべき実力が期待された。ここで松浦を中心にいささかみてみたい。松浦有志太郎は熊本県の出身。明治二五年に、土肥より二年あとに東大を卒業、同大学助手を経て同二八年、県立熊本病院外

科の初代部長、同三二年、文部省より皮膚病学微生物学研究所のためドイツ留学を命じられる。土肥が学んだナイセルにも就き同三五年帰国と同時に京都帝国大学医科大学教授、皮膚病学微生物学講座担当を命じられた。

その後にてきた九大には土肥の門下から教授が出ているが、京大の場合、土肥とは無関係である。土肥は同三四年、第一回日本皮膚科学会総会を開くが、同三七年、第四回を初めて地方である京都で開く。しかし会長は土肥であった。松浦は特別講演として「ピエドラ、白癬及黄癬」を行っている。同四三年、第一〇回総会を大阪で行うが（このときも会長は土肥）松浦は特別講演として「寄生性皮膚病の病理及療法」を行う。同四五年、第一二回を京都（会長は土肥）で開き、松浦は「梅毒の治療並再発」を述べている。

大正八年、松浦は病氣などを理由に教授在任一七年でその職を辞し、あとを京大出身の門下、松本にゆだねることになり、松本はよく師のあとを継承した。大正一一年、第二二回総会（土肥会長）が京都で開催され、松本は「内分泌と皮膚疾患」を担当。昭和一三年、第三八回総

会は松本信一会長で、自ら「サルワルサンの副作用」について報告。このように日本皮膚科学会の会長は一応選任の形をとっていたものの土肥の教授在任中は、彼が独占する形であった。また彼には同会を背負って立つという自負もあつた。他方、松浦は無欲恬淡で、権力を望まなかつた。ただ性病の流行には心を痛め、その原因のみに飲酒があると、大正一一年、京都禁酒会長に就き、後半生を禁酒運動に捧げた。土肥も松浦を丁重に扱い、上記のごとく京都で学会のさいは彼に講演を依頼した。なお、第四回総会では京都府立医大前身校の皮膚科担任だった江馬章太郎にも「梅毒の療法」を依頼しているが、彼も土肥門ではなかつた。

このように土肥と松浦という個人的関係でみるかぎり、対立意識はなかつたといつて良いが、ただ現実面では対立ととられても仕方ないようなこともあつた。むしろ、現在では東大と京大の隔壁はないといつてよいだろうと、第三者の筆者は思っている。